

6回目の核実験もあつさり挙行

北朝鮮を御せない トランプ政権の問々

国際ジャーナリスト
泉 洋海



開発した水爆用小型容器と見られる装置を前に喜ぶ金正恩氏

共和党大物議員も苦言呈す

北朝鮮がミサイル発射による攻撃準備をエスカレートさせている。8月末には、新型の中距離弾道ミサイル

「火星12」を試射するなど、米軍基地があるグアムへの攻撃に向け技術と実績を積み重ねた。

一方の米国、トランプ大統領は「世界が見たこともないような炎と怒りに見舞われる」といった激しい言葉で、北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長を牽制するが、北東アジアの緊張が高まるだけ。

北朝鮮はあたかも、トランプ政権や同盟国の日本や韓国をあざ笑うかのように、6度目の核実験を断行した。

悪夢のような1週間だった。8月初旬、北朝鮮の金緑謙・戦略軍司令官は、新型の中距離弾道ミサイル「火星12」4発をグアム島周辺30～40kmの海上に同時に撃ち込む計画を明らかにし、8月中旬には完成させるとした。

しかも、計画どおりに実施されれば、日本の島根、広島、高知3県の上空

を通るという。

火星12は北朝鮮が開発している新地中距離弾道ミサイルで、射程は4000～5000kmと推定される。5月に北西部龟城から発射され、東北東方面へ高く打ち上げる「ロケット轨道」で飛行、787km先の日本海上に落下した。

北朝鮮はハワイやアラスカが射程内にあり、重量の大きい核弾頭の搭載が可能としている。

これに対し、ゴルフ場で休暇を過ごしていたトランプ大統領は即座に「北朝鮮は米国にこれ以上、脅しをかけない方がいい。世界がこれまで見たこともないような炎と怒りに見舞われることになるだろう」と強い言葉で警告。

さらに、金正恩氏を「常軌を逸している」と批判したという。この応

酬は米国だけでなく、世界を震撼させた。



8月末に試射された火星12

米国メディアはただちに反応。ニューヨーク・タイムズ紙は、1945年に広島に原爆を投下した際のトルーマン大統領の言葉の響きにも似ていると指摘。CNNテレビは「トランプ氏は戦争をするのか」と疑問を呈した。しかし、トランプ氏の脅しは北朝鮮をさらりに刺激し、緊張感を高めた。

北朝鮮の金・戦略軍司令官はその後、「ゴルフ場にこもっていた米国の統帥権者は、情勢判断できないまま『炎と怒り』などと述べ、わが砲兵たちの神経を逆なでしている」と当てこすり、「中距離弾道ミサイル『火星12』の4発同時発射による米領グア



武力行使をちらつかせるトランプ氏だが……（ホワイトハウス）

ム島の包囲射撃計画案を慎重に検討している」と語った。米国内の知識人からも、米国が武力行使をちらつかせねばちらつかせるほど、北朝鮮は自らのミサイル試射や核武装を正当化しやすくなるといった声が上がる。

与党共和党的ジョン・マケイン上院軍事委員長も「このようなレトリックで問題が解決できるとは思えない」などとしてトランプ氏の勇み足をたしなめた。

それでも、トランプ氏はツイッター

で「北朝鮮が分別のない行動をした場合、米国の軍事的解決の準備は万全で、臨戦態勢にある」と表現した。その後、北朝鮮は日本上空を通過する弾道ミサイルを発射さらに6回目となる核実験も強行した。

日韓が火の粉被る軍事選択肢

それでは、「炎と怒り」の米国の軍事戦略とはどのようなものか。軍事力の行使には3つのケースが考えられるというが、いずれも北朝鮮の近隣諸国を巻き込み、全面戦争に発展する危険性をはらむ。

1つ目は、北朝鮮の核施設やミサイル格納庫をピンポイントで先制攻撃する「限定攻撃」。アムに拠点がある戦略爆撃機B-1Bによる空爆や、朝鮮半島沖で展開している駆逐艦による巡航ミサイル攻撃を考えられる。

北朝鮮の戦意をくじき、核やミサイルの開発を止めるためだが、金正恩氏が先制攻撃を受けたと思いつみ、反撃する恐れがある。

2つ目は、北朝鮮国内に点在する核施設やミサイルの発射拠点を「一

鮮は既に主な核施設やミサイル発射台などを、地下深くやトンネル内に建造しており、これらの拠点を無力化するのは簡単ではないそうだ。さらに、残存施設からの反撃も予想される。

3つ目は、金正恩氏ら指導部の暗殺計画で、「斬首作戦」とも呼ばれている。これも失敗すれば、全面戦争に発展する恐れがある。仮に実施するとしても、いずれの計画も米国や同盟国にとって危険なものになりそうだ。

「北朝鮮はならぬもの国家だ」「北朝鮮が核実験を行なった。彼らの言葉や行動は米国にとって、とても敵意があり、危険であり続けている」北朝鮮が6回目となる核実験を行なった後、トランプ大統領はツイッターにそう書いた。

この日、即座に安倍晋三首相とも電話会談を複数回行ない、日米で北朝鮮に対し「これまでにない強い圧力をかける」ことで一致した。

だが、北朝鮮の狙いは、米国を交渉に引きずり込むことにある。米国が北朝鮮の核開発中止、非核化を条件としている限り、北朝鮮とは話が喰み合わず、強行策に出ながら、

米国の「超えてはならない一線（レッドライン）」を探ることだろう。

しかも、米国では、トランプ政権が迷走している。「総ての選択肢がテープルの上にある」とするトランプ氏に対し、マテイス国防長官、ティラーソン国務長官とともに外交による解決を主張。「軍事的解決はない」と発言したトランプ氏の最側近バノン元主席戦略官・上級顧問は、政権を去った。政権内でも意見の相違が目立つ上、厳しい政権運営を強いられているトランプ大統領が、北朝鮮との交戦に活路を見いだそうとする可能性もある。

米国が軍事オプションを選んだ場合、同盟国である日本や韓国が報復の犠牲になる恐れがある。いずれも不慣れで分別のない為政者が、核のボタンを握り合う怖さがある。

ただ、石油禁輸措置で北朝鮮への制裁圧力を強めつつ、対話の道を探るしかないが、米国攻撃が可能な核弾頭を搭載する大陸間弾道ミサイル（ICBM）の完成が近い中、北朝鮮が対話に応じる可能性は極めて低い。核保有国になりつつある北朝鮮の戦略を根本的に見直す必要があるだろう。